

## 阿蘇山の火山活動解説資料（平成 21 年 8 月）

福岡管区气象台  
火山監視・情報センター

中岳第一火口では、南側火口壁の噴気孔で火炎現象<sup>1)</sup>及び赤熱現象<sup>2)</sup>を引き続き観測しました。その他の火山活動に特段の変化はなく、火口周辺に影響を及ぼす噴火の兆候はみられません。ただし、火口内では噴気や火山ガスの噴出がみられることから、火口周辺では火山灰等の噴出に警戒が必要です。また、火口付近では火山ガスに対する注意が必要です。

平成 19 年 12 月 1 日に噴火予報（噴火警戒レベル 1、平常）を発表しました。その後、予報警報事項に変更はありません。

### ○ 8 月の活動概況

#### ・噴煙など表面現象の状況（図 2、図 3、図 8、図 9）

阿蘇火山博物館に設置している遠望カメラによる観測では、噴煙の高さは火口縁上概ね 200m（最高高度は 400m）で経過しました。

夜間に実施した現地調査では南側火口壁の噴気孔で高さ 1～2 m の火炎現象<sup>1)</sup>及び赤熱現象<sup>2)</sup>を引き続き観測しました。

南側火口壁の温度<sup>3)</sup>は 289～348℃（7 月：314～322℃）で経過し、熱異常域の分布も前月と比べて特段の変化はありませんでした。

湯だまり<sup>4)</sup>の色は乳緑色で経過しました。また、表面温度<sup>3)</sup>は 55～60℃（7 月：53～59℃）で経過し、前月と比べて特段の変化はありませんでした。噴湯現象は前月に引き続き観測されました。

- 1) 熱せられた噴出物が炎のように見える現象です。
- 2) 地下から高温の火山ガス等が噴出する際に、周辺の地表面が熱せられて赤く見える現象です。
- 3) 赤外放射温度計で観測しています。赤外放射温度計は、物体が放射する赤外線を検知して温度を測定する測器で、熱源から離れた場所から測定できる利点がありますが、測定距離や大気等の影響で実際の熱源の温度よりも低く測定される場合があります。
- 4) 活動静穏期中岳第一火口には、地下水などを起源とする約 50～60℃の緑色のお湯がたまっており、これを湯だまりと呼んでいます。火山活動が活発化するにつれ、湯だまり温度が上昇・噴湯して湯量の減少や濁りがみられ、その過程で土砂を噴き上げる土砂噴出現象等が起り始めることが知られています。

この火山活動解説資料は福岡管区气象台ホームページ (<http://www.jma-net.go.jp/fukuoka/>) や気象庁ホームページ (<http://www.seisvol.kishou.go.jp/tokyo/volcano.html>) でも閲覧することができます。次回の火山活動解説資料（平成 21 年 9 月分）は平成 21 年 10 月 7 日に発表する予定です。

※この資料は気象庁のほか、京都大学、独立行政法人防災科学技術研究所及び阿蘇火山博物館のデータも利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院長の承認を得て、同院発行の『数値地図 50mメッシュ（標高）』及び『数値地図 10mメッシュ（火山標高）』を使用しています（承認番号：平 20 業使、第 385 号）。また、同院発行の『数値地図 25000（地図画像）』を複製しています（承認番号：平 20 業複、第 647 号）。

・地震や微動の発生状況（図 2～4）

孤立型微動<sup>5)</sup>の日回数は 120～159 回、月回数は 4,308 回（7 月：4,316 回）とやや多い状態で経過しました。

火山性地震の月回数は 21 回（7 月：64 回）と少ない状態で経過しました。震源は中岳第一火口付近のごく浅いところに分布し、これまでと比べて特段の変化はありませんでした。

・地殻変動の状況（図 1、図 5）

GPS 連続観測では、中岳第一火口を囲むいずれの基線においても長期的な縮みの傾向が続いています。

・火山ガスの状況（図 3）

24 日に実施した火山ガスの観測では、二酸化硫黄の放出量は一日あたり 400 トン（7 月：300 トン）と少ない状態で経過しました。

・全磁力の状況（図 6、図 7）

全磁力連続観測では、中岳第一火口の北西側火口縁にある観測点において、2006 年夏頃から火山体内部の温度上昇を示すと考えられる変化がみられていましたが、2009 年頃から熱活動の高まりを示す傾向は認められなくなりました。

・南阿蘇村吉岡の噴気地帯の状況（図 10、図 11）

4 日に実施した現地調査では、2007 年 5 月から閉塞していた B 1 噴気孔の東側約 2 m に新たな噴気孔が形成されているのを確認しました。新噴気孔の大きさは長径約 3 m、短径約 1.5 m で、噴気の高さは約 20 m でした。

5) 阿蘇山特有の微動で、火口直下のごく浅い場所で発生しており、周期 0.5～1.0 秒、継続時間 10 秒程度で振幅が  $5 \mu\text{m/s}$  以上のものを孤立型微動としています。

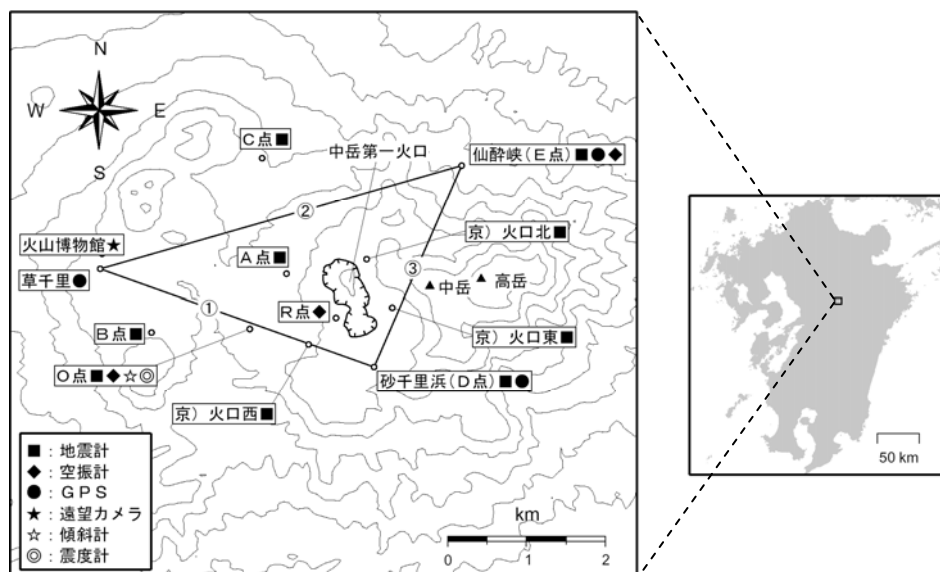


図 1 阿蘇山 観測点配置図

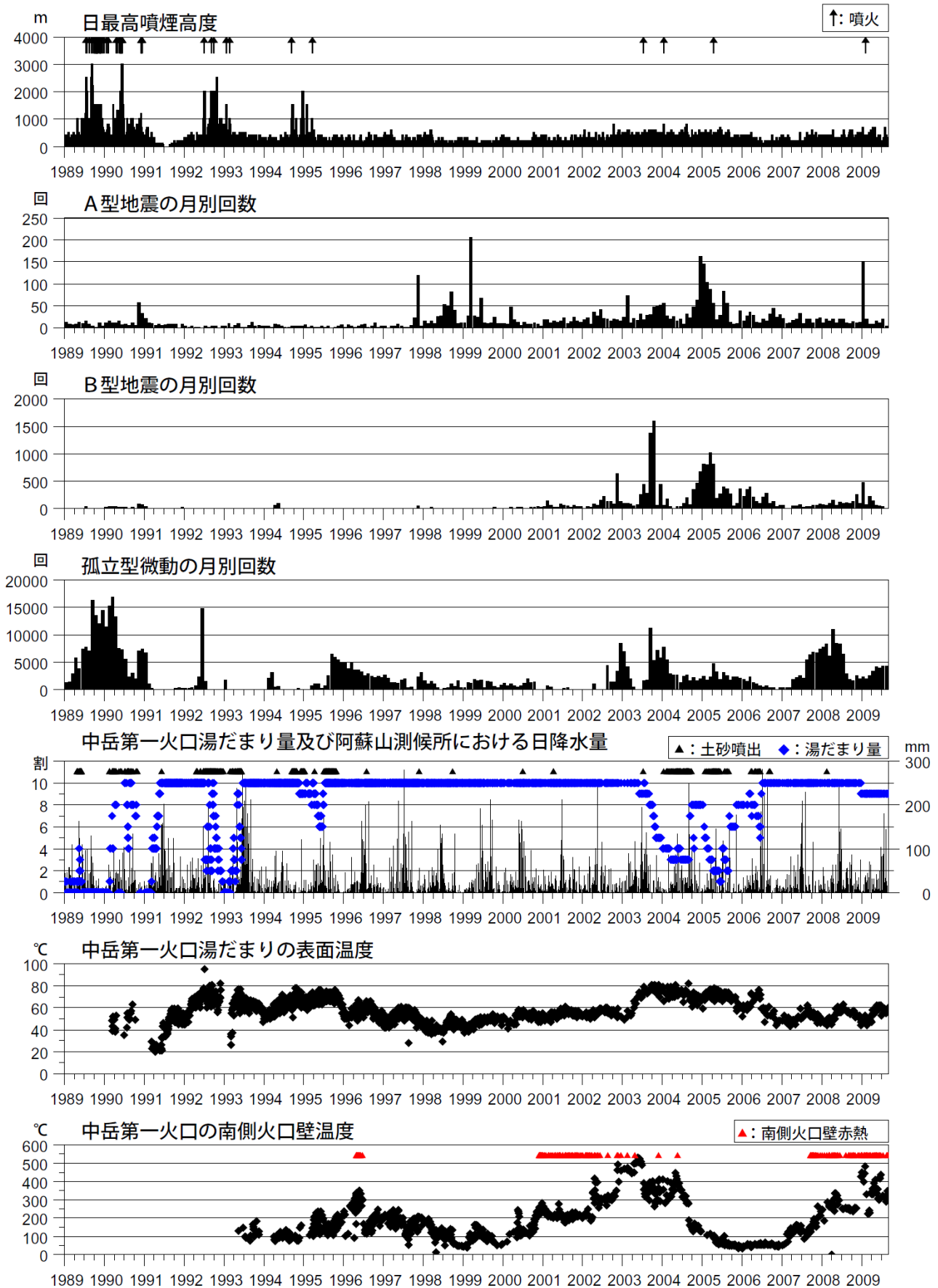


図 2 阿蘇山 火山活動経過図（1989 年 1 月～2009 年 8 月）

< 8 月の活動状況 >

- ・ 噴煙の高さは火口縁上概ね 200m（最高高度は 400m）で経過しました。
- ・ 孤立型微動の月回数は 4,308 回とやや多い状態で経過しました。

\* 2002 年 3 月 1 日から検測基準を変位波形から速度波形に変更しました。

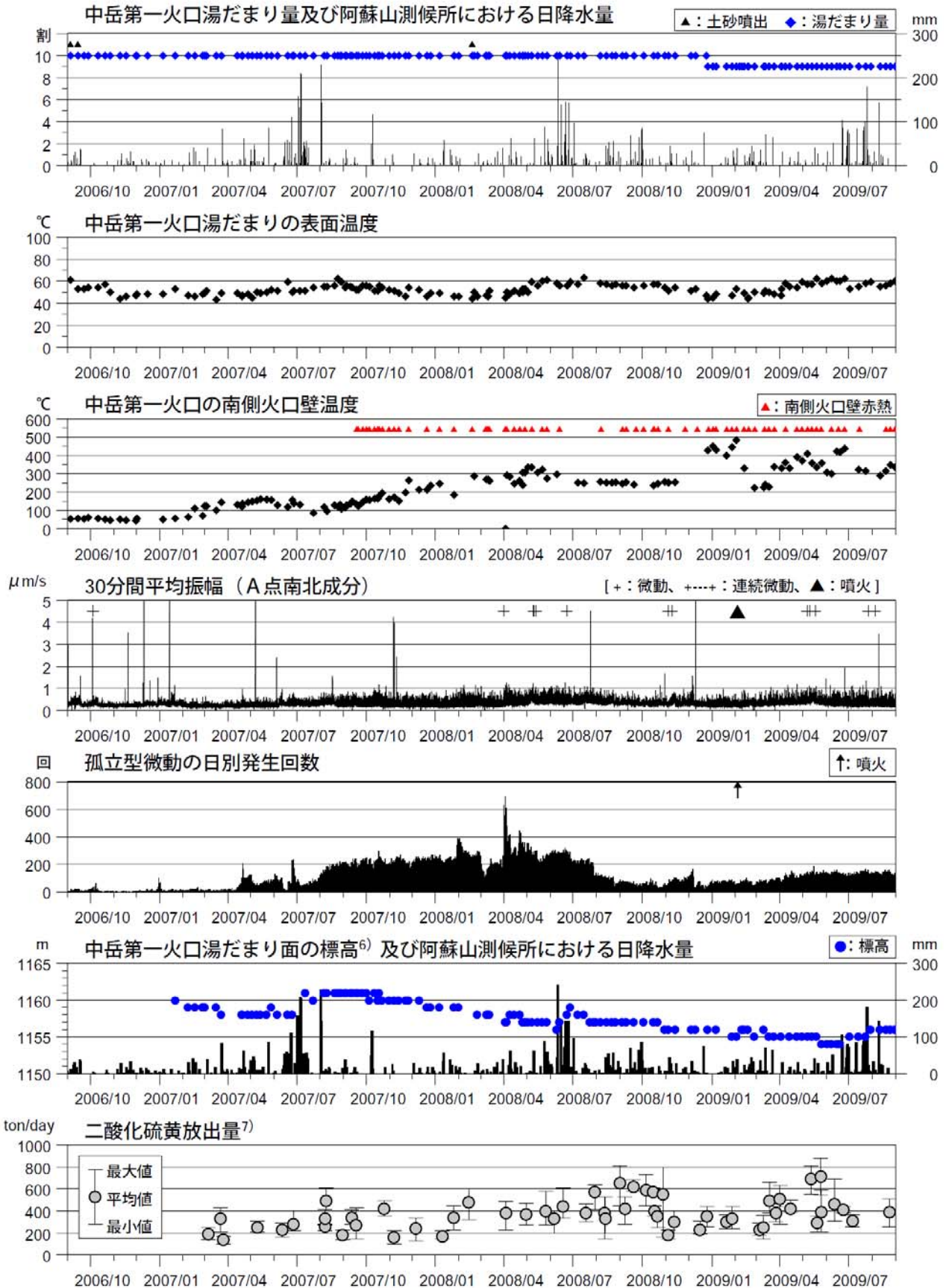


図3 阿蘇山 火山活動経過図（2006年7月～2009年8月）

< 8月の活動状況 >

- ・南側火口壁の温度は 289～348℃で経過しました。
- ・湯だまりの表面温度は 55～60℃で経過しました。

6) 湯だまり面の標高の観測は、2007年1月21日から実施しています。

7) 火山ガスの観測は、2007年3月6日から実施しています。

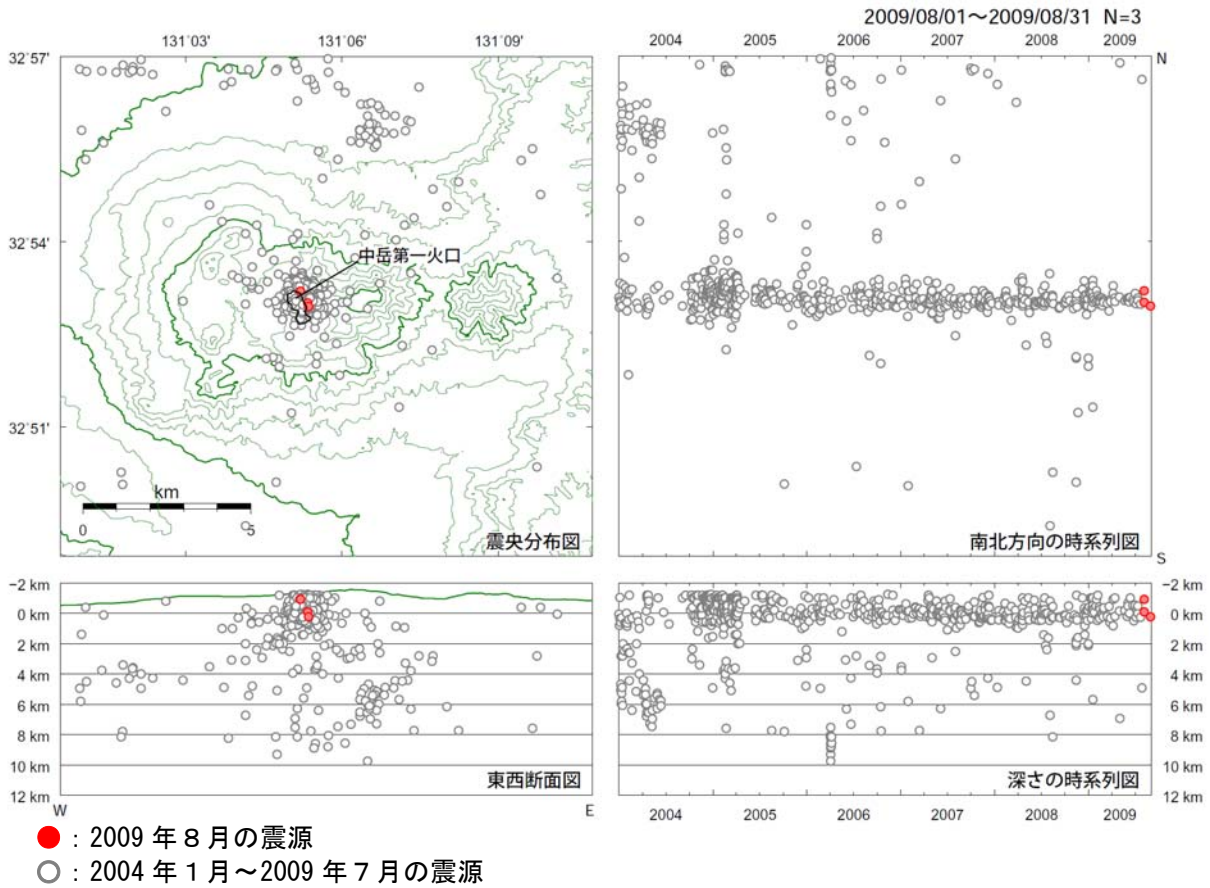


図 4※ 阿蘇山 震源分布図 (2004 年 1 月～2009 年 8 月)

< 8 月の活動状況 >

火山性地震の震源はこれまでと同様、中岳第一火口付近のごく浅いところに分布しました。

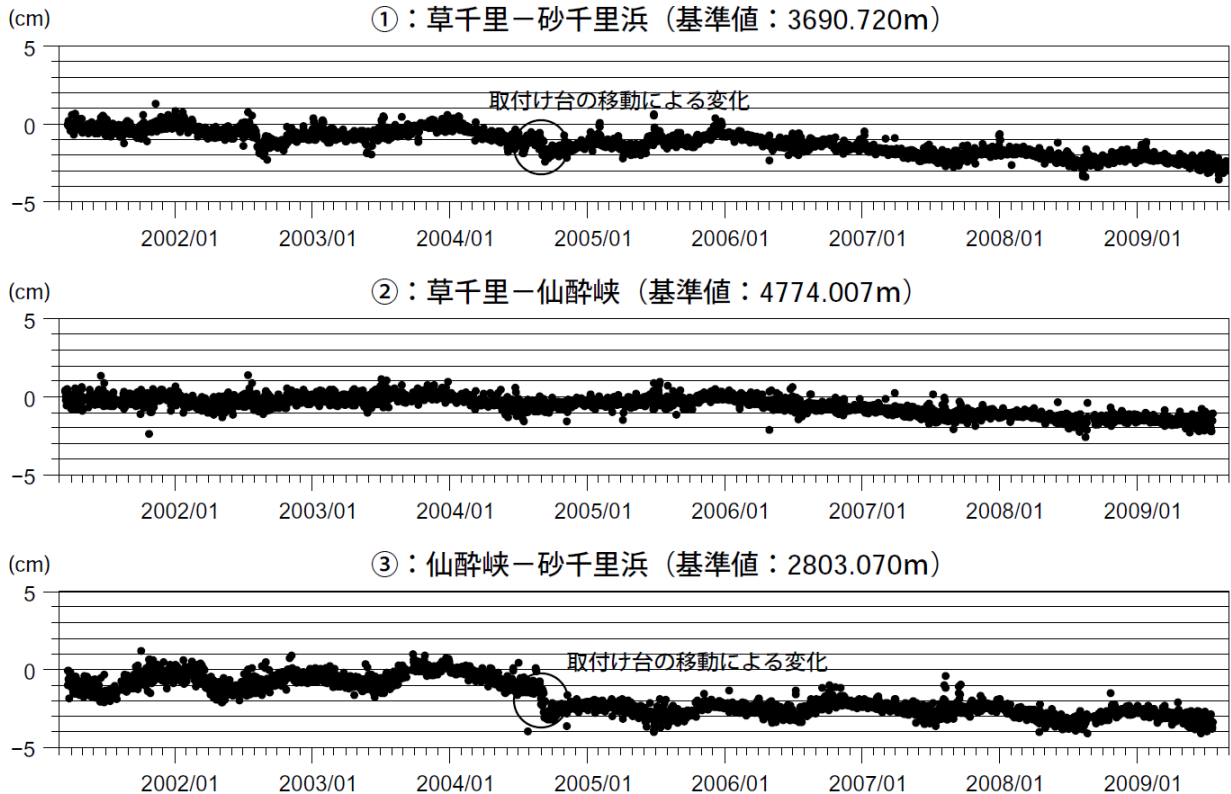


図 5 阿蘇山 GPS連続観測による基線長変化 (2001 年 3 月～2009 年 8 月)

中岳第一火口を囲むいずれの基線においても長期的な縮みの傾向が続いています。

この基線は図 1 の①～③に対応しています。

2008 年 2 月 1 日砂千里浜観測点の取付け台の移動により、草千里－砂千里浜、仙酔峡－砂千里浜の基線長が約 70cm ずれたため、補正して表示しています。

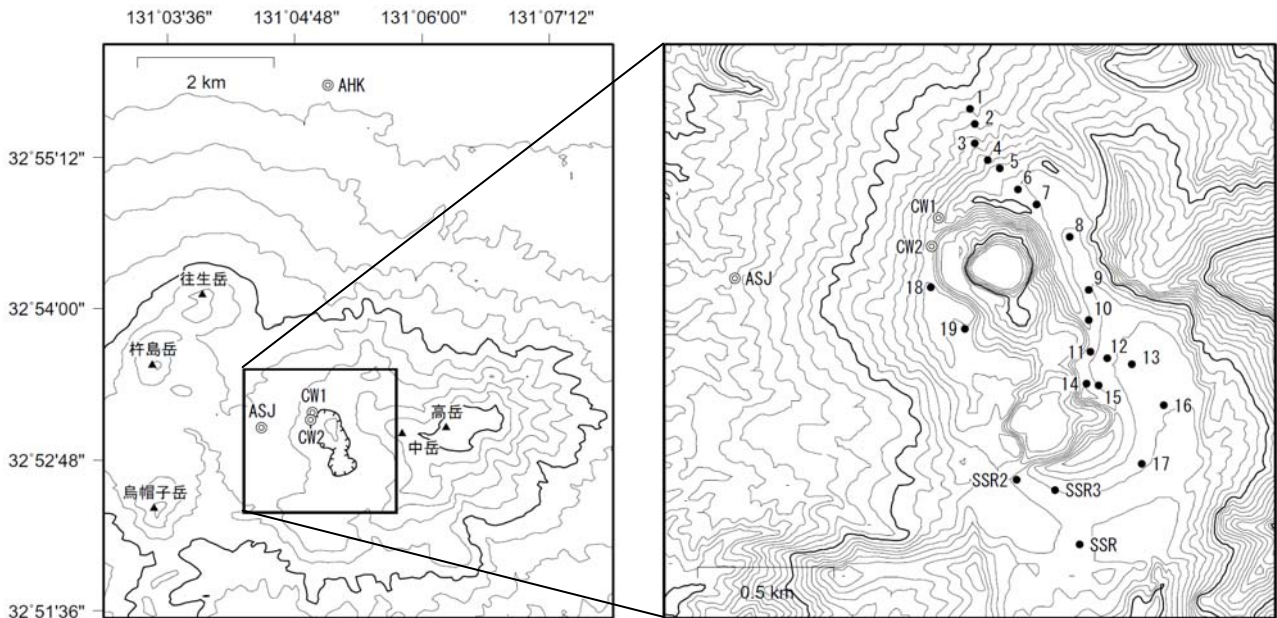


図 6 阿蘇山 全磁力観測点配置図 (◎：連続観測点 ●：繰返し観測点)

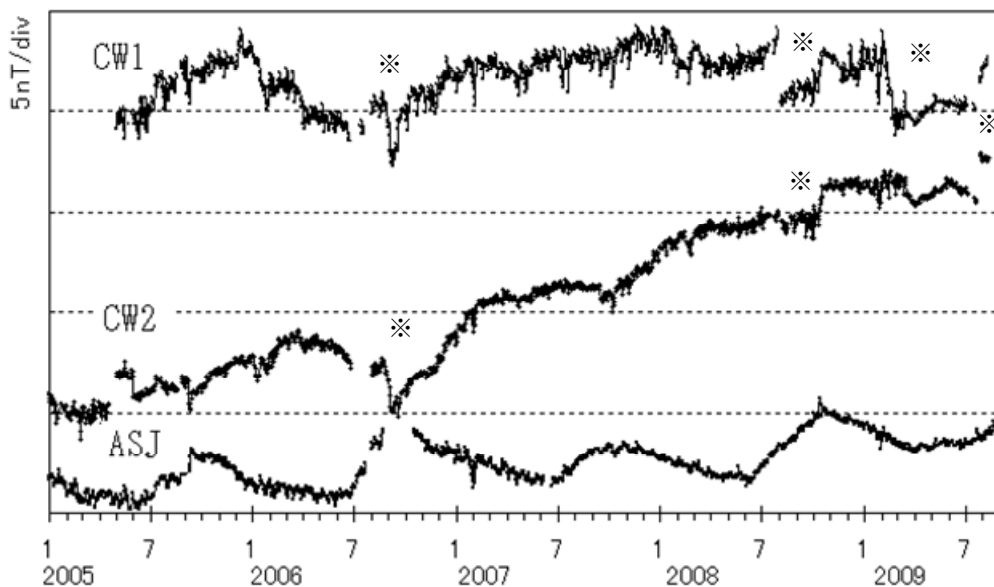


図 7 阿蘇山 阿蘇山麓 (AHK) を基準とした阿蘇中岳火口周辺の全磁力変化  
(2005 年 1 月～2009 年 8 月)

中岳第一火口の北西側火口縁にある観測点 (CW1、CW2) において、2006 年夏頃から火山体内部の温度上昇を示すと考えられる変化がみられていましたが、2009 年頃から熱活動の高まりを示す傾向は認められなくなりました。

※は火山活動に伴う変化ではないと思われます。原因は不明ですが、検出器周辺の土砂の移動あるいは観測機器の変調による可能性があります。

この全磁力変化は図 6 の CW1、CW2、ASJ に対応しています。

nT (ナノテスラ) は磁場の強さを表す単位です。

〔補足〕 火山体周辺の全磁力変化と火山体内部の温度変化

北側の観測点で**全磁力増加** [消磁] → 火山体内部の**温度上昇**を示唆する変化  
南側の観測点で**全磁力減少**

北側の観測点で**全磁力減少** [帯磁] → 火山体内部の**温度低下**を示唆する変化  
南側の観測点で**全磁力増加**

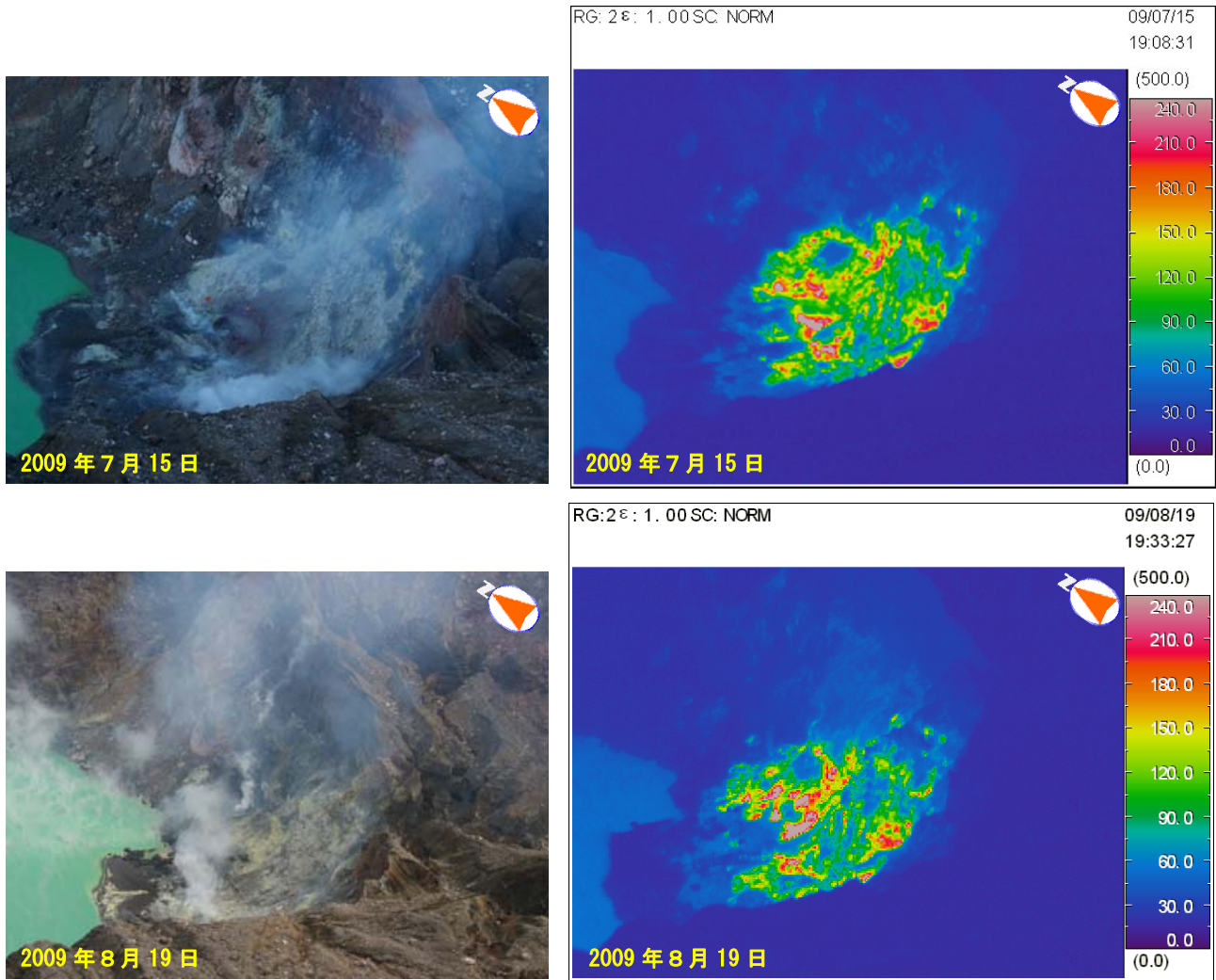
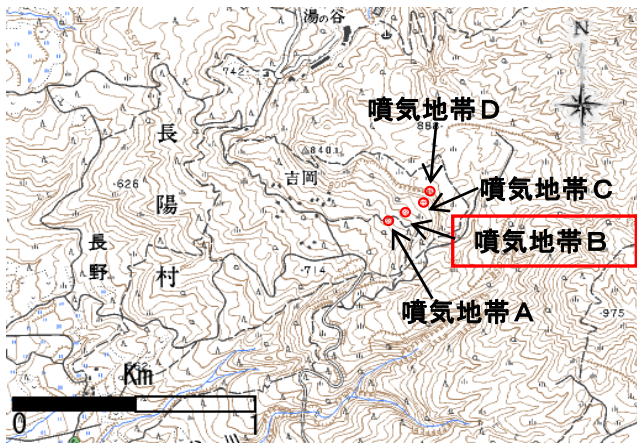


図 8 阿蘇山 赤外熱映像装置<sup>8)</sup>による中岳第一火口南側火口壁の地表面温度分布  
7月15日と比べて熱異常域の分布に大きな変化はありませんでした。

8) 赤外熱映像装置は物体が放射する赤外線を感じて温度分布を測定する測器です。熱源から離れた場所から測定することができる利点がありますが、測定距離や大気等の影響で実際の熱源の温度よりも低く測定される場合があります。



図 9 阿蘇山 夜間に実施した現地調査の状況  
南側火口壁の矢印部分で高さ1～2m程度の火炎現象を観測しました。



噴気地帯位置図



噴気地帯周辺図

図 10 阿蘇山 南阿蘇村吉岡の噴気地帯位置図及び周辺図



図 11 阿蘇山 噴気地帯 B 及び新しく形成された噴気孔の状況

- ・ 4 日に実施した現地調査では、2007 年 5 月から閉塞していた B 1 噴気孔の東側約 2 m に新たな噴気孔が形成されているのを確認しました。
- ・ 新噴気孔の大きさは長径約 3 m、短径約 1.5 m で、噴気の高さは約 20 m でした。